

エッセイ 古本屋の仕事場

昔の市場 腕伏せの再現

橋口 侯之介（誠心堂書店）

S お腕を使ったユニークな入札風景



最近、昭和三十年代末まで続いていた古書の入札方法「腕伏せ」^{わんぶせ}を再現する催しが東京古書会館であった。おそらく大正期から東京古典会の市で始まったと思われるが、その起源はわかっていない。

腕伏せというのは、漆塗りのお碗のふたの裏側に値段を書いて、中座^{なかざ}と呼ばれる進行係に放り投げ、もつとも高値を書いた者に落札させるという入札方法である。それを今回、東京古典会のベテランたちの指導で再現したのだ。わたしも見よう見まねで参加し

てみた。

昔の市場では、その当日、中座を正面にして、コの字の形に参加者が座る。そこに次に入札する本が回わってくるので、各自はそれを素早く見て隣に渡していく。回し終えたところで、それを欲しい者はお碗の裏に墨で値段を書き入れ、中座にボンと放り投げる。その時、値段が見えないように裏返して投げるのでこの名がついたらしい。中座は何個かのお碗が集まったところで値段を見比べ、最も高札^{たかざ}の者の名前と値段を発表する。こうして次から次へ入札が進行していくのである。

会場は畳みの大部屋で、座布団が敷かれており、おおむね皆の座る席は決まっていた。三十人くらいがいつも座った。今回、この催しを開いたのは、古い荷物室からこの腕伏せ用の道具一式が見つかったからだ。引き出し状の小箱が三十個ほど入ったけんどん式の塗り箱が出てきた。ひとつの小箱には硯・筆が入っていた。別にお碗も三、四十個あった。

お碗は内側が朱色、外側は黒色の塗りで、高台^{こうだい}の輪の中の部分が朱に塗られていて、そこに店の名前が黒漆で書かれている。内側が朱色なの



で、そこに墨で文字や数字が書けるのだ。市の始まる前には各自が自分の椀を受け取って席に座る。座席には硯・筆が入った小箱に、濡れた布が用意されている。

当日出される本は同業者による出品である。会員自身が出すこともあるし、地方の本屋さんが送ってくるものもある。いわゆるセドリと呼ばれるフリーの買い出し人もよく持ってきていた。それらは会場の周りに整理されて置いてあり、あらかじめ下見しておくことができた。

時間がくると、中座はこれから入札にかける本を簡単に紹介する。それから本を参加者に回す。そのとき初めてこの本の著者は誰だろう、これは何の本だろうなどと長い時間かけて見ているは迷惑になる。知らない本や不要と判断した本はすぐに隣に回す。ここでは素早く判断するために、保存程度や刷りの良し悪しなどを主に見るのである。そういう意味で本の知識がないとなかなか買えないものである。

値段は一本書きといて、価格をひとつしか書かない。紙を用いて封筒に入れていく現行の入札方法では、値段によって複数の価格を書くことができる。一万円以上なら三つ（三枚という）、十万円以上なら四つ（四枚）というふうに書ける。これを何枚というのは、複数回の入札ができるのと同じだからである。この方法だと二万円から三万円の間で欲しいというようにときに助かる。競争相手が多そうなら、上の値段を高めを書いておく、といった作戦を練ることもできる。入札に競りの要素を取り入れた方法なのだ。



しかし、椀伏せでは一枚分しか書けなかった。これでは相場を知らないとますます買えない。昔気質の本屋さんは、何枚札が使える現行の仕組みになっても、値段を離さずにきっちり相場に沿って入れたものだ。今なら二万、二万五千、三万円と入れるところ、そういう人は二万三千、二万四千、二万五千円という幅のきつい入れ方をした。「安すぎず、高すぎず」を守っていた。職人氣質の相場観だった。

値段を記入してお椀を中座に向かって投げるとき、畳の上とはいえ下手をすれば木製のお椀は割れたりキズがつきかねない。それを平行に滑らせるように投げて、ちょうど中座の手の届くところに止まるようにするのがよい。中座にのこのこと、取りに行かせるようなコントロールの悪い投げ方はまずい。裏返って皆に値段が見えてしまっても恥ずかしい。上手に投げないといけないのだ。中座はそれらをさっと見比べ、上位で争うふたつに絞って最終確認をすると、その場で書名と値段、落札した店名を発声する。読み終わって

すぐお椀は、持ち主に投げ返される。その投げ方もうまいもので、当人の前にきちんと届く。この間の流れがスムーズにいかないといけないのだ。受け取った者は、座席に用意されている濡れた布でぬぐうと書いてあった墨はきれいに消える。そうしている内に次の本が回される。

§古書市場での支払い

発声後、その場で係員（経営員という）によって帳面がつけられている。これを山帳やまちょうといい、その品物の出品者が誰とは一般参加者には特定できないように符号化された数字と書名、買い手の名、落札価を素早く書いていく。誰からも札の入らなかつたもの、出品者が事前に届け出た最低値（止めとという）に値がみたなかつたものは戻される。それをボーという。山帳にさつと一本棒を書くことからきているのだろう。これも今も封筒に赤字でボーを書くのと同じである。

市が終わると、この山帳をもとに買い手ごとにまとめた伝票をつくる。合計金額もすばやく計算される。これを「ヌキ」といい、今でも使われる用語である。出品記号ごとにまとめた売り伝票も作成される。ボーがあつたときは出品者にそのリスト「ボーヌキ」が渡される。こうした会計方法は腕伏せに限らずどの市でも同じで、平成になってコンピューターが導入されるまで続いた。計算が終わるのを市の参加者は待つのだが、その間、会場には算盤の音が響き渡っていたものだ。

ヌキができてきたら、伝票と落札した現品を各自が確認する（引き合

わせという）。それで支払いをして帰る。売りの多い人は金がもらえた。当時の市場の精算は当日に限られており、買った者はその日のうちに支払うのが原則だった。もつとも、買い手にはいつも豊富な現金があるとは限らない。そこで一週間以内ないしは一月以内に支払う約束手形のようなものが許された。それを「金券」という。

現在でも市場の支払いは売買差し引きして、買いの多い者は一週間以内に精算することが義務づけられている。信頼関係の上に成立っている仕組みなので、遅れると催促状がすぐ来る。そこで、買い手にもう少し余裕を与えようと、東京古典会では会員にかぎって一ヶ月の猶予を許している。金額を書いた約束状を提出するのだが、それを今でも金券といっている。世間でいう金券は、商品券のように商品が買えたり、現金化できるが、それとは性格が違う。これはありがたい制度で、市場にはいつ欲しい本が出るとはかぎらない。突然、永年探していた本が出てきたりする。そのときに資金繰りがうまくいかないので買えなかつたでは悔しい。一ヶ月とはいえ、それを助ける仕組みがあるのである。

§厳しいが人間的な市

腕伏せでは中座の権限は「絶対」で、その場で発表する落札者と価格は訂正できない。洋本のフリといわれた競り方式の市では、「出直り」といって買ったものに納得がいかないとその場で返品ができた。フリ市では落札した本はすぐ当人の手元に投げられてくる。だからその場で本

を確認して出直ることができたのだ。その本はもういちど競りなおす。それに比べると腕伏せでは出直りは無しとされた。また現在の古書市場では、入札封筒に落丁や傷などの欠点を注意書きするようになっていて、そこない瑕疵が買ってから見つかったときには値引きや返品ができる。しかし、腕伏せではそういうことも受け付けなかった。だから本を市で買うというのは今よりずっと厳しいことだったのだ。

わたしの先代・田中十蔵はこの中座を長いこと勤めていた。身内のひいきのようだが、この人は曲がったことが嫌いで誠実を絵に描いたような人だったので、厳しい市にあつて、多くの人から信頼されていた。とくに若い人に対して寛容だったので入門にしやすいと時々先輩から聞かされた。たとえば他のひとがせいぜい数千円なのに、一人だけ数万円と桁違いに書いてしまったとき、相場に照らして高すぎると、わざと安めに発声してくれるということはあつたらしい。逆にふだんからきちんと相場で購入する人が、そのときに安すぎる値しか出してこないと高めに誘導することもあつた。これは出品してくる店のためでもある。現代は、とにかく公平だから、書かれていた値段どおりに事務的に落札してしまうが、良し悪しはともかく腕伏せ時代は人間的な市場だった。

§ 粋な遊びから起った？

腕伏せは和本の市(東京古典会)だけで行なわれた独特の方法だった。わたしはその起源は、お座敷芸だったのではないかと思っている。

江戸期の古書は、本屋仲間公式の市場もあつたが、それ以上にふだんから親しくしている講のメンバーでの取引が多かつた。本屋の日記などをくくつていくと、必ず講や小さい仲間内での市が出てくる。あながい頻繁に開いていた。そのような講が開かれる場所は、料亭がよく使われた。それほど高級な店ではないが、座敷のある料理屋が会場になる。そこで会食をしながらいろいろな相談をするのだが、本が持ち込まれて入札をすることも多かつたのだ。

この伝統は最近まであつたようで、私より十歳ほど先輩の本屋さんたちは料理屋で新年会を催し、そこに本を持ち寄つてよくミニ入札会をやつた。その「歩金」で当日の会費をまかなつたのだという。洋本のような重いものを持つて宴会はきついが、和本なら軽い。歩金というのは、市の手数料のことで公式には通常5%程度である。それを新年会では売り方から二割、買い方から一割というふうに大目に決めてお祝儀の手数料をとるのである。それで十分ご馳走が食べられたのだそうだ。

史料では講などの私的な市での取引方法を細かく書いていないので、腕伏せをしたという具体的な記録はないが、座興としてどこかの宴席でお腕のふたが小道具に使われたかもしれないではないか。墨や硯は店から借りればよい。楽しく遊び感覚で入札ができる。それが広がつて、大きな市にも普及したのではないだろうか。ペンや鉛筆を日常で使う以前の粋な発想、というのがわたしの考えた起源だ。昔の本屋さんには、柔軟で融通がきいていたから。